

## 本書のねらいと使い方

医療行為とは患者の受診があつてはじめて開始されるものであり、医療側の好みによって患者を選ぶことは通常不可能である。したがって、医療者側には患者が提示するさまざまな病的状態に可能な限り対応できるような不断の準備と努力が要求される。しかも医学は時代とともに進歩するので、医師としての研鑽は必然的に生涯にわたる。眼科学は眼球とその付属器および視覚に関する臨床医学分野であるが、その領域に生じる病態には炎症、腫瘍、循環障害、代謝障害、遺伝性変性、加齢変化、退行性変化などバラエティに富んだ病理変化が伴い、それらに対応する治療法には内科的治療、外科手術、レーザー治療など多岐に及ぶものがある。

本書の読者の多くは第一線で活躍される臨床眼科医であると思われるが、1人の眼科医が眼科学のすべての領域に精通することは現代の眼科学の進歩から鑑みてほぼ不可能ではないかと考えられる。それだけ情報量や技術量が膨大なものとなっているのである。したがって、いろいろな分野に精通した医師同士が連携し合いながらそれぞれの得意分野を分担して診療を進めていくのも望ましい姿であろう。しかし、現実には日本国中のすべての眼科医がそのような恵まれた環境で診療しているわけではない。眼科専門医制度では専門医には眼科学のほぼすべての領域である一定水準の水準を満たすことを義務づけている。これは最初に医療機関を受診する患者に対応する医師が誰であろうとある程度のオールラウンドな診断と治療の方向性を考慮できるようになるためであり、日本の眼科医の医療レベルを担保するための方策として意義がある。

本書はこのような第一線で眼科診療に携わる眼科医を対象として、特に薬物治療の実際をそれぞれの分野で活躍されている気鋭の眼科医の方々をお願いして薬物療法の理論と実際の両方の側面からわかりやすく記載していただいた。医学において内科的側面と外科的側面とは常に相伴って実戦されるものではあるが、本書は特に薬物治療という内科的眼科治療学ともいべき切り口で眼科学の実際をまとめたものである。

本書の使い方には読者の用途に従っていろいろあつてしかるべきである。編者自身は本書を編集するにあたって、自身の大学病院眼科外来に常備して、自分たちが診断した患者に対する薬物治療法の選択のために用いることができるように配慮したつもりである。現代の眼科薬物治療学の実際を知るために通読するのももちろん大変有意義なことと思うし、眼科専門医試験の勉強のために、また専門医としての知識の整理のために用いるにも格好の好書となったと思う。医学は日進月歩であるので、数年後には改訂版を刊行する必要もあるかと思うが、それはそれで医学の進歩を実感できることでもあり、今からその日が来るのを期待してもいる。

最後に、お忙しい中、本書の趣旨にご賛同下さり執筆していただいた執筆者の方々に心から深謝申し上げ、序文としたい。

中澤 満 (弘前大学)